

梁山丁の歩み(下)

李 青

一九八七年 七十四歳

また、新しい一年が、始まった。山丁は日記の扉にこう記している。

私は数え年で七十四歳であり、満七十二歳になった。私は大変精力的になったように感じる。白髪に黒髪が生えるようになり、若返った。この一年に若い心を持ち、下記の著作の編集に励みたい。

一、『石隙丹楓』(東北淪陥時期叢書その二・男性作家小説選)

二、『荒原勁草』(同上・小説選)

三、『凍土氷花』(同上・詩選)

四、『東北作家群像』(文学回想録その二)

五、『文壇交遊録』(文学回想録その三)

これは、山丁の一九八七年の活動計画である。しかし、

この計画のなかには、かれ自身の作品は盛り込まれていなかった。

しかし、友人のなかには、かれの今の仕事に反対している者がいる。かれらは、このような作品集を編集するには、材料さえあれば、誰にでも、できることである。

山丁のすべき仕事は、長編小説『灰色の城』、『紅い草原』を完成することであると述べていた。

実は、新作のために、山丁は何年も資料を準備し、書き出しもした。しかし、かれは、自分が計画した本のシリーズの編集も、たいへん有意義だと思った。現に多くの老作家はすでにこの世を去っていた。まだ健在な者も、老いたり、病んだり、海外に移住したりして、本を整理する力はもはやなかった。山丁はこういった人々のために、かつての作品をもう一度読者に捧げたい。こうして

亡くなった亡霊を慰め、まだ健在な老作家たちに、日の目をみる時が来たということを証明しようとした。

かれの元日の日記から当時の精神状態が分かる。

一九八七年（農曆丁卯）一月一日 木曜日

日差しは、勉強机と客間をとおりこして、南側の部屋の前まで照らしていた。これは元旦の太陽である。私の気持ちを象徴している。除夜の鐘を聞き、スポーツ番組を見てから、私の一年の幕が開けた。心身ともに充実している。

長年、山丁は『鴨緑江』の通信教授を務めていた。月に十数名の学生の原稿に手を入れ、私見をも書かねばならなかった。また、佳作について『鴨緑江』に推薦していたのである。

教え子のなかにも、優秀な者は二人いた。一人は農村出身の女性、彭文である。かの女は、『鴨緑江』に散文を発表したことがある。もう一人は、遼河油田の王志明である。かれは、現在、雑誌『地火』の編集をしている。著作も多く、一九九五年に二十万字からなる『当代を予告する宗師』を発表、好評を博した。

一月、山丁のところに、黄万華から『瀋陽文学芸術資料』第四輯が送られてきた。そのなかには、黄の書いた

「東北郷土文学の開拓者——梁山丁および東北淪陷時期の創作を読む——」があった。こうした、山丁文学についての論文やインタビューは、雑誌、新聞に数多く見られた。

一月二十六日、黄万華より手紙が届いた。すでに編集に取りかかった『現代文学大辞典』では、山丁の『緑の谷』と作品に登場する霍鳳を、それぞれ「主要作品類」と「人物様相類」に収録したことを知らせてくれたのだ。このニュースは、山丁の『緑の谷』の再評価に積極的な役割を果たした。

二月、山丁夫妻は長春で春節を迎えた。長春で冷歌、廬湘、常毅、曹懷藩などの旧友と会った。

春節の後、かれは『緑の谷』再版のために、前書きを書いたが、後に、これを再版瑣記「万年松の葉は青い」と換えた。

四月に、山丁は前妻の死去十周年に際して、長女が書いた『羅麦詩文集』に『生と死の十年間』をよせた。亡き妻に哀悼の意を表した。山丁は羅麦との間に子供が三人いる。文革の十年間に理不尽な迫害を受け、とうとう自分の作品の再版を見ることができなかった。

四月七日、アメリカの学者葛浩文（ゴールド・ブラッド）は、瀋陽へ山丁を訪ねて来た。当時、外国人との接

触は、さまざまな規定があったため、省作家協会主席の金河、副主席の暁丸に付き添われ、山丁は老幹部会議室で葛浩文（ゴールド・ブラッド）と会見した。葛浩文は中国語を流暢に話せるため、山丁の緊張は、幾分か和らげられた。かれらは、葛浩文の新作『蕭紅評伝』をめぐって、いくつか具体的な問題について意見を交わした。最後に、互いに自作を交換して、一時間におよぶ会談は終わった。

山丁は暇をみて、計十五万字の「東北作家史話」、「東北作家群」、「文壇交遊録」などの文学回想録を書き進めていた。黒竜江北方出版社から出版する予定だったが、資金困難のため頓挫した。

四月末、『緑の谷』の初稿が送られてきた。この本の再版は意義重大なため、山丁は非常に慎重に校正に臨んでいた。

五月十二日、山丁は馬加、方氷、謝挺宇、思基、暁丸、単復、陳言などと、『作家生活報』、『芒種』、『詩潮』、『文芸広角』が主催した「毛沢東の延安文芸座談会での談話」四十五周年を記念する座談会に参加した。

十七日、山丁は省文化庁が主催した「毛沢東の延安文芸座談会での談話」四十五周年の座談会にも誘われた。

山丁は、延安で毛沢東の講話を自分の耳で聞いたことはなかったが、かれは毛沢東の講話の学習に極めて真面目に取り組んだ。

六月十五日、山丁にとっては記念すべき日であった。

この日は山丁の名誉回復して八周年の記念日であり、また長編小説『緑の谷』を再版する日でもあった。四十年前、『緑の谷』を出版するや、日本人のブラックリストに載せられ、東北を追われる羽目になった。三十年前の一九五七年には、『緑の谷』が日本人によって翻訳されたことがあることを理由に、「漢奸文人」、「歴史反革命分子」のレッテルを貼られ、監獄に入れられた。今日、その『緑の谷』が再評価されることは、まさに感無量であった。

六月いっぱい、山丁は本の仕分けや、本を友人に郵送するのに忙しかった。

六月二十六日、『瀋陽晩報』記者の張秋協が、山丁の自宅でかれをインタビューした。山丁は自分が文学の道を選択した経緯を話した。このインタビューは、一九八七年七月七日の『瀋陽晩報』に、「東北の豊かな大地に根を降ろして」と題して、掲載された。

七月二日に、『体育天地』第二版に、馬鵬拳が書いた

「質素な食をとり、多く歩き、怒らず、家庭円満——老作家梁山丁の養生の道を語る」が発表された。

七月三日に、山丁は北京に向き、蕭軍の八十歳の誕生日祝いに参加した。山丁は蕭軍、蕭紅、羅烽、白朗と、一九三三年に文学をという共通の趣向から親友になった。名譽回復されてから、山丁は蕭軍ら旧友人と依然として親密な付き合いをしている。北京から瀋陽に戻ってくる時、山丁は詩『北京行』を書いて、一九八七年八月十四日の『文学信息』に発表した。

七月五日、山東大学から高蘭教授が死去した通知ももらった。訃報を聞いた山丁は、非常に深い悲しみに陥った。高蘭は著名な詩人である。一九八三年に済南で開かれた学会に参加したおり、高蘭を訪ねたことが今も忘れられなかった。

七月十六日、『瀋陽晩報』は、李正中の「山丁と『緑の谷』」を発表した。山丁の長編小説『緑の谷』は、「東北淪陥時期系列叢書」として、社会で大きな反響を呼んだ。再版されてから、紹介や評論の文章は国内外の新聞を賑わした。

『緑の谷』の再版を祝うために、瀋陽にある山丁の自宅に二十人の友人が集まってくれた。

九月、友人の陳隄が、山丁に会いに瀋陽へ来た。二人は、南甸の方未艾（方賸）を訪ねた。方未艾は共産党員かつ、元ソ連共産党員でもあり、山東大学教授だった。

しかし、反右派闘争や、文化大革命で職を失った。現在、方未艾は本溪市政治協商委員会委員である。方は蕭軍の学友であり、陳隄や山丁と、三十年代の友人である。山丁は陳隄と三日間滞在してから、瀋陽に戻った。

十月中旬、遼寧大学教授、瀋陽市副市長張毓茂が、山丁に二冊の本を持ってきてくれた。『二十世紀中国両岸文学史』、『蕭軍伝』である。それとともに、一万字におよぶ『緑の谷』の評論をも渡してくれた。

この時期に、山丁は中国作家協会の正会員によくなることができた。入会は山丁にとってはかねてからの夢がかなった。

山丁は本を出版するたびに、保存のために中国文学館に寄贈していた。近年は、長春図書館や瀋陽図書館からも、山丁の作品の保存のために、作品の寄贈を要請されている。

『緑の谷』が再版されてから、山丁は男性作家小説選集『石隙丹楓』（後、『燭心集』に改名）の出版に取りかかった。十二月末に、十六人の作家の伝記を完成した。こ

の十六人のうちには、すでに健在の者が少なかったため、伝記を正確に書くには、困難をとまなう箇所があり、かなりの精力と時間を費やした。

よく、前書きは、「本の目」だと言われている。山丁は、この本の前書きを年末に仕上げなければならなかった。一月の間、昼も夜も努力して、一万字の前書き、『好かれるミューズ神』を書き終えた。

一九八八年 七十五歳

山丁の趣味は囲碁である。しかも、なかなかの腕前である。前年の春節と敬老の日に、定年した幹部は、文化界と囲碁の試合を催した。今年も春節が終わって早々に、省作家協会と省出版社の主催で囲碁の試合をやった。チャンピオンと第二位は、馬加と山丁だった。

山丁は長い収容所生活によって、もともと貴重な創作時間を奪われた。かれは晩年の残り少ない限られた時間を十分に利用し、一生懸命仕事をしている。元旦が過ぎると、かれは著作目録と資料を整理し始めた。

一月二十八日、原洮南連合中学生で、現黒竜江省郵電局局長の趙凡が、瀋陽へ出張に来たついでに、山丁を訪ねた。資料を残すために、趙凡は山丁の日常生活から原

稿を書く姿まで丹念に録画を取った。

三月二十二日、山丁は癌にかかって、海軍病院に入院中の蕭軍を、北京に見舞った。山丁が遼寧省の友人の芳いの言葉を伝えると、蕭軍はたんへん感激し、「皆さんは私を心配し、私も皆さんのことを案じている。誠に大吉だ。」と書いてくれた。この短い言葉が、蕭軍の絶筆になった。

山丁は北京に半月ほど留まり、四月の初めに瀋陽に戻った。蕭軍との対面はこれが最後になるとは、夢にも思わなかった。

この間に、山丁の再版された『緑の谷』を評価する詩歌や文章は、依然として新聞と雑誌によく見られた。詩人の劉丹華は、一九八八年四月十八日の『遼寧日報』に、『再び「緑の谷」を読んで』を発表した。

四月に、山丁は『小学生学習指導』に頼まれて、はしがきに十八行の詩『先生の目から』を書いた。

五月十五日、山丁は社会科学院副院長の呂欽文に招かれて、中央文学研究所研究員徐邁翔が主催する小規模な座談会に参加した。この会議は、中央文学研究所が吉林社会科学院に委託して、召集したものである。座談会は、『中国現代作家作品研究資料叢書』（中国現代文学資料編

集』甲、乙二種類が含まれる。)の出版について、山丁の意見を求めた。

六月二十三日朝、中央放送局は蕭軍が一九八八年六月二十二日朝五十分に死去したニュースを流した。訃報を聞いた山丁は、悲しみに堪えながら、電話で馬加、張毓茂にも知らせた。当日の夜、山丁はさっそく北京に向向いた。

山丁と蕭軍との友情は、三十年代に築き上げたものである。五十年のうちに、互いにさまざまな試練に耐えてきた。一九七九年七月、名誉回復した後すぐ、真つ先に同じく名誉回復したばかりの蕭軍を訪ねた。しかし、その十年後に蕭軍は病魔に尊い命を奪われてしまった。

北京での蕭軍の追悼会が終わってから、蕭軍夫人の王徳芬および家族が蕭軍記念文集の出版を希望したため、責任重大なこの仕事もまた、山丁がなうことになった。北京にいる間に、山丁はまず周りの蕭軍の旧友などに、広く原稿を依頼した。瀋陽に戻ってきてから、山丁は編集委員会を組織し、皆の力で集金したり、原稿を集めたりしていた。参加者には、省作家協会の方氷、于鉄、老作家の李正中、于雷、遼寧春風文芸出版社副編集者、瀋陽市副市長の張毓茂および蕭軍の生前旧友、陳隄、廬湘

などがいた。出版にこぎつけるまで、まる三年間かかった。一九九一年三月四日に、遼寧省作家出版大廈で『蕭軍記念集』発行記念行事を催した。

八月、『瀋陽日報』に山丁が書いた『蕭軍が微笑んでいる』と、蕭軍の霊前で、方未艾、陳隄とともに撮影した写真を掲載した。

またこの時期に、『遼寧大学学报』の一九八八年第三期に、中国文学教授の張毓茂が書いた『山丁の「緑の谷」を評する』が発表された。

『蕭軍記念集』の手助けするために、蕭軍の娘の蕭耘と夫の王建中が八月中旬、山丁の家にしばらく滞在した。記念集の出版で、一番の問題は金銭問題だった。方氷と郭鋒が、資金集めに、奔走してくれた。

九月、広西人民出版社が、黄万華編の『新秋海棠』を出版した。山丁の『双子』(『孿生』)も収録された。

十二月、山丁が編集した『東北文学研究資料』第七輯が出版された。この輯は、『蕭軍記念專輯』として、瀋陽で印刷した。印刷の質を落とさないために、山丁は印刷工場で半月ほど事業員と組版をしたり、校正したりした。山丁は古希にもかかわらず、自分の行動で親友の蕭軍に精一杯敬意をはらったのだった。

一九八八年、湖南文芸出版社より出版された『中国現代文学作家ペンネーム録』に、山丁に関する箇所があった。同年、中国鉱業大学出版社が出版した『中国現代文学辞典』（徐業街、徐瑞岳主編）に山丁の『山風』、『季草』、『緑の谷』が載った。

一九八九年 七十六歳

『蕭軍記念集』の初稿が少しずつ上がってきた。一日も早く世に問うために、山丁は懸命に原稿に目を通した。同時に、長女が編集している『羅麦詩文集』も手伝っていた。

五月、山丁は『羅麦詩文集』の序によせる「『良い子』、こんにちは、保母さん」を書き終えた。

六月、山丁は哈爾濱文学院理事、教授に任命された。

八月、山丁が編集した「東北淪陥時期系列叢書」、男性作家小説選『燭心集』が、遼寧春風文芸出版社から出版された。この本は当初『石隙丹楓』と名付けていたが、蕭軍死去一周年を記念して、蕭軍の作品『燭心』に借りて、新たに『燭心集』にした。

『燭心集』が出版されてから、黒竜江省文学学会と哈爾濱文学院は共同で、『燭心集』出版記念の座談会を開

いた。参加者は、淪陥時期文学が抗日戦争期間に果たした役割を改めて評価した。山丁夫妻と責任編集者の郜文も座談会に参加した。

山丁夫妻は、郜文と座談会に参加する以外に、また「東北淪陥時期系列叢書」（すでに三冊を上梓した）を編集するにあたって、苦労が多く、疲労を感じている。心身ともにリラックスするために、山丁夫妻は郜文を誘い、哈爾濱、牡丹江、鏡泊湖などを観光して、八月十八日に瀋陽に帰った。

十月の敬老の日に、遼寧省作家協会と遼寧出版社は、老人囲碁の試合を主催した。結局、老作家の陳嶼にチャンピオンをもっていかれ、山丁は二位だった。

十月末に、省作家協会老幹部処は定年した老作家を組織して、南方の沿海諸都市に観光に出かけた。一行は、瀋陽からまず車で大連まで行き、大連からフェリーで福州に到着した。福州では、幹部療養院に落ち着いた。

老作家一行は福建省の鼓浪嶼、武夷山、九曲、廈門、廈門植物園、泉州、石獅などを観光した。帰りに、山丁は北京と天津に立ち寄った。天津で、李光烂の未亡人、山丁の義妹にあたる羅平一家を訪ねた。李光烂は、元遼寧大学副学長だった。後、南開大学法学研究所に転勤し

た。一九八八年六月二十四日に病死した。両家は数十年
来親しくつき合ってきた親戚でもある。この後、山丁は
船で大連まで戻った。大連療養院に十年以上、入院して
いた元上司の田手を見舞った。羅麦の姉にも会った。

四十日の長旅を終えて、山丁は瀋陽に戻った。今回の
旅は、名所旧跡を満喫したばかりでなく、中国の第十一
次三中全会後に、各地で実施されていた改革開放政策を
目の当たりにして、大満足した。このほかに、この古希
に近い老人は、武夷山、七星岩に登ったことによつて、
驚異的な精神力と体力を証明した。しかしながら、旅行
中に瞬間的に失明したり、目眩したりするような症状が
出ており、身体に潜んでいる病魔は山丁を少しづつ迫っ
てきていたのだった。

山丁は『蕭軍記念集』の一日も早い出版のために、相
変わらず日々勤しんだ。

『燭心集』が出版された後、新聞で紹介され、評論な
ども次から次へと発表され、多忙な山丁の心を和ませて
くれた。

広西人民出版社から出版された『中国現代文学詞典』
に、山丁の短編小説『山風』、長編小説『緑の谷』、短編
小説『郷愁』、『豊年』を収録された。「著名人物様相」

の項には、「霍風」が紹介された。

また、瀋陽出版社から出版された、張毓茂著の『東北
新文学論叢』には、『緑の谷』を探求する』が掲載され
た。

山丁は『遼寧老年報』一九八九年一月号に、詩『羅烽
の長寿を遙かな祈る』を、『新文学史料』一九八九年第
二期に、回想録『蕭軍の不死の精神』を発表した。

一九九〇年 七十七歳

一月十日の早朝三時に、山丁は、突然、四肢が動か
なくなり、言語も不明瞭になった。明らかに、老年性脳梗
塞の症状だった。幸いにして、直ちに入院したおかげで、
一命を取りとめた。入院中に「竜胆溶栓冲服剂」を服用
してから、特に効き目著しく、病状はめっきり軽くなっ
た。治療の効果を高めるために、皆から、大連での療養
を勧められた。

一九八八年七月以来、山丁は、二十五万字の『蕭軍記
念專輯』（『東北研究史料』第七輯）、七十万字の『蕭軍記
念集』を一年四ヶ月の短い期間に上梓させた。編集委員
はほかに何人かいたが、山丁は総責任者として陣頭指
揮を取らなければならなかった。膨大な原稿のなかから、

必要なものを抽出することは、七十後半の老人にとって、並大抵の仕事ではなかった。

山丁は大連での療養を受け入れた。『蕭軍記念集』に残された未完の仕事は、副編集長の郭鋒などに託した。

三月二十三日、山丁は病気を抱えながら、長女の羅頤主編の『羅麦詩文集』研究会に参加した。

三月二十七日、山丁は省作家協会処処長の張家利、山丁夫人、長女に伴われ「遼東半島号」で、大連幹部療養院に向かった。出発する前に旧友の李正中は、山丁に詩を書いて送った。山丁に対する友人の思いが込められている。

山丁は大連で五ヶ月の療養生活を送った。

最初の二ヶ月の間、毎日、午前中に点滴の治療を受けた。午後は、同じ療養所にいる患者、特に東北三省から療養に来た文学界の人達と歓談し、情報交換した。

メーデーが過ぎると、点滴は中止され、投薬治療だけになった。この頃、山丁は、外出も許可されるほど回復していた。かれはときどき夫人に伴われて、大連市内の街や公園を散策したり、商店街で生活用品を買ったりした。山丁がもっとも好きなのは、本屋へ行くことだった。半年もたたないうちに、山丁は多くの本を購入し、病室

にある事務机には、本がいっぱい並んでいた。

文人どうしの交流は、書簡が多い。山丁は、ほとんど毎日手紙を書いていた。お見舞いの手紙や仕事の書類も毎日のようにきていた。もっとも多かったのは、山丁の代わりに仕事をしてくれていた郭鋒からの書簡である。

山丁はたまに詩を書いて、友人に送った。毛沢東の『延安文艺座谈会での講話』発表四十周年を記念して、山丁は詩「あ！私は生きている」を書いて、哈爾濱の友人に送り、後、『文学信息』（一九九〇年五十一期）に発表した。哈爾濱文学連合会の主席劉樹声は、この詩を『詩林』に紹介し、『詩林』五月号は山丁のこの詩を転載した。現在、『梁山丁詩選』に収録されている。

目が醒めると、爽やかな朝を見た

真っ赤な太陽が、ゆっくりと昇ってきた

あ、私は生きている！

生きているからこそ、仕事をしなければならぬ

命の虹のように

* * *

目が醒めると、黄昏を見た

南山の夜景は華やかだ

あ、私は生きている！

生きているからこそ、考えなければならぬ
星輝く夜空は、まるで童話の世界だ

* * *

目が醒めると、真夜中を見た

夜空に弓張月が架かっている

あ、私は生きている！

生きているからこそ、郷土小説を

創作しなければならぬ

詩からは、山丁の文学への執着心、深い愛を感じとることができる。

六月八日、郭鋒が『蕭軍記念集』の初稿を山丁に見てもらおうと持ってきた。当初、瀋陽の編集委員たちは、山丁の健康状態を配慮し、初稿を見せないつもりだったが、山丁はどうしても初稿を自ら見ないと安心しないと聞かなかった。

山丁は九時に就寝という療養院の規定を破り、夜遅くまで、初稿を読んでいた。かれは、十八日に郭鋒が瀋陽に帰るまでに間に合うように、すさまじいスピードで、六十四万字の原稿を読み終えたのだった。

六月二十日、山丁は夫人同伴で、錦県で行われた蕭軍納骨儀式に参加した。全国各地から、蕭軍の生前の旧友、

陳隄、廬湘、方未艾、閔沫南、李正中夫妻、郭鋒夫妻、里楊夫妻、劉樹声、張毓茂、および蕭軍未亡人王德芬と親族が参列した。

蕭軍の墓は、錦県（現在は凌海市）の凌河公園の東北に建てられた。敷地は約二百平方メートル、墓前に骨箱が置かれ、両側に花束が供えられている。墓碑には、蕭軍が生前に書いた七言絶句が刻まれている。

文武ともに思う通りに行かず

青春に多くの悔いが残り

死後に一片の雨雲のように

雨降れば身軽になろう

この後、参加者の希望で、「蕭軍研究会」準備委員会が成立し、山丁が会長に選ばれた。

七月一日、山丁夫妻は再び大連に戻り、療養生活を続けた。一日も早く、普通の生活に戻るために、夫人とともに登山、水泳、習字……、リハビリに励んだ。

夏の間、山丁は病状が安定しており、身体は見事に回復した。療養院にいる間、多くの親友、家族が見舞いに訪れた。山丁は皆の見舞いを快く迎え入れた。

療養院や家族は、国慶節が過ぎてから、退院して瀋陽に帰ろうと考えていたが、山丁は皆が引き留めたにもか

かわらず、八月二十九日に北上し、五ヶ月ぶりに瀋陽の家に帰った。

山丁は家に帰ってから、何ものにも束縛されずに、『蕭軍記念集』の出版に全力を投入した。

この一年に、山丁の長編小説『緑の谷』にたいする研究は、ますます込み入ったものとなってきた。『瀋陽師範学院学报』の一九九〇年第一期に、遼寧社会科学院文学研究所所長・研究員の王建中が書いた、『階級抗争図・郷土風俗画―梁山丁の「緑の谷」を評す』が掲載された。王建中は、「意義深い階級抗争図」、「さまざま人物像」、「色彩に富んだ郷土風俗画」などの角度から作品を分析し、全面的に作品を分析した。後に、この論文は『抗戦文芸研究』に収録された。

山丁は『海蘭江』の一九九〇年四十八期に、書評『梁鏡の「山参曲」を読んで』を、一九九〇年九月の『大連日報』に『蕭軍墓碑に関して』を発表した。

一九九一年 七十八歳

元旦後、待ちに待った『蕭軍記念集』を、ようやく世に問うことができた。山丁は、貪るように読んで、喜んだ。『蕭軍記念集』の出版のために、山丁をはじめ、編

集委員の郭鋒、李正中、張毓茂、于雷、陳隄、廬湘などは心血を注いだ。

盛大な発売式を行うために、編集員のメンバーたちは、綿密に式次第を練り上げた。

三月四日、『蕭軍記念集』発売式が省出版大廈で盛大に行われた。三月中に、宣伝、本の仕分け、販売、発送などで、一回はまた、一苦勞をした。

三月八日、山丁のもとに、日本の友人八木寛から、『十五年戦争と文学』（山田敬三・呂元明編 東方書店）が送られてきた。八木寛は、現在、東方書店の支配人であり、四十年代の「満映」時代の友人でもあった。

四月三十日、山丁夫妻は、開原老獅子溝へ、山丁の親の墓参りをしてきた。

五月五日、山丁は「東北淪陥時期文学国際学術研究会」準備委員会に参加するため、長春へ赴いた。

六月、病院で身体検査をした結果、脳梗塞の危険性が、依然として高いと警告された。九月の国際学術会議に出席できるように、山丁はやむを得ず再び遼寧中医病院に入院した。

八月二十六日、呼蘭で「蕭紅誕生八十周年学術研究会」が開かれた。山丁は発表の準備をしたが、大事をと

って、参加を断念した。

九月二日、山丁は遼寧少児出版社編集者の張雨問、杜曉明に伴われて、長春「東北淪陷時期文学国際学術研究会」に参加した。山丁の会議に寄せた論文『私と郷土文学』は、優秀論文賞を授与された。後に、この論文は、一九九二年第二期の『社会科学陣線』に転載された。同時に、馮為群、王建中、李春燕、李樹権共編の『東北淪陷時期文学国際学術研究会論文集』（瀋陽出版社）にも収録された。

このほかに、山丁が一九四〇年に書いた短編小説『残欠者』が、『中国新文学大系』（一九三七—一九四七）の第二巻・第三冊に収録された。康濯が書いた前書きの、山丁に対する評価は、極めて高かった。淪陷時期の作家梅娘、田琳、秋螢の作品もあった。

山丁は自分の作品の入っている『中国新文学大系』二冊が贈呈されたにもかかわらず、本好きな山丁は、一月の給料でワンセット二十冊の『中国新文学大系』を購入した。

この頃、山丁が書いた三十三万字の中短編小説、『天のはてに伸ばした大地』が、まもなく瀋陽出版社から出版されることになった。この本の出版は、晩年の山丁に

とっては、最大の精神的な慰めと言えるだろう。

山丁は小説、詩を書く以外、書道と絵画も極めて堪能である。一九九〇年、遼寧不老松画会会長の王宴と知り合った。王宴の紹介で、山丁も不老松画会に入会し、画会の顧問を依頼された。

九月、山丁は招きに応じて、遼寧省「九・一八事変（満洲事変）六十周年画展」の開幕式に参加した。展示会で、王宴、魯迅美術学院院長の王盛烈と記念撮影した。山丁は、また画展に寄せて、『東北画風勃興を祝して』を書き、一九九二年二月の『文学信息』に発表した。

十月、山丁は北京へ向かった。そこで子供たちや友人を訪ね、創作活動するつもりであったが、都合により、二週間あまり滞在することしかできなかった。

十一月五日、主編の山丁の名義で『蕭軍記念集』出版に関係した瀋陽在住の友人を集め、『蕭軍記念集』出版の成功を祝った。この本は、一九八八年七月から始まり、三年間の間、編集委員たちがさまざまな困難を克服、資金の工面もし、ようやく今日に至って、立派に上梓されたものだった。参加者は、山丁や遼寧出版の功績を讃えた。こうして、『蕭軍記念集』の仕事に、正式にピリオドが打たれた。

錦県人民政府蕭軍記念館は、編集委員たちの功勞に酬いるため、全員に掛け軸を送った。山丁がもらった掛け軸には、「五十年文壇の知己肝胆相照らす」と書かれていた。

十一月、『梁山丁詩選』が出版された。草色の表紙に印刷された、「梁山丁詩選」という五文字は、親友の李正中が書いてくれたものである。本は頁数が少なく、些か寂しく感じるが、いずれも山丁が慎重に吟味した詩ばかりだった。本は、哈爾濱文学院が出資、印刷してくれた。このために、親友の陳隄は大いに力を貸してくれた。十月十六日、陳隄が瀋陽へ本を届けにきてくれた時、山丁は感激して、自ら駅へ出向かえに行った。

十二月二十四日、山丁は回想録の第三部分「文壇交遊録」のもう一編、「私と吳瑛・吳瑯」を書き終えた。

『千山文庫』は、遼寧作家協会と遼寧春風文芸出版社の連携で、毎年作家協会に属している作家の本を計画的に出版している。山丁はここ数年で、数多くの仕事をこなした。『東北作家史話』、『東北作家群像』、『文壇交遊録』、それに「序と跋」を含めた四作を完成した。

山丁は、二十万字の散文集と四千字の「序」を十二月三十一日に脱稿した。山丁は、『梁山丁散文選』の一日

も早い出版を心から願った。

この一年に山丁は、詩「中国共産党誕生七十周年を祝して」を一九九一年九月十七日の『哈爾濱日報』に、『東北淪陥時期文学国際學術研討會論文集』（一九九二年・瀋陽出版社）には、「私と東北の郷土文学」が収録されている。さらに、「張青楡詩文集を祝して」を一九九一年九月三日の『文学信息』に発表した。

一九九二年 七十九歳

新年早々、山丁は『移植文学との抗争』を脱稿した。これは遼寧大学日本研究所の平献明の依頼で書いたものである。

一月七日、黒竜江大学教授、哈爾濱文学学院院长の陳隄が、山丁の家へやってきた。山丁を哈爾濱文学院理事兼教授とする就任依頼書を手渡してくれた。八年のうちに、山丁は哈爾濱文学院から出版した『東北文学研究資料』計七冊を主編した。『文学信息』に積極的に投稿し、無償で黙々と多くの仕事をしてきた。

一月八日から十日まで、山丁は陳隄と瀋陽出版社主催の『東北現代文学大系』出版座談会に参加した。今度の出版はスケールが大きく、黒竜江、吉林、遼寧三省合同

で十二冊もの編集するつもりである。山丁はこの新たな仕事に、非常に熱心だった。かれは、自分の編集した『東北淪陥時期系列叢書』にある散文部分と詩の部分の原稿を編集委員会に貸したり、原稿集めを手伝ったりした。

春節、山丁夫妻は北京で子供たちと楽しく過ごした。

二月二十七日、山丁は親友、女流作家田琳が深圳で急死したことを知った。悲しさのあまり、徹夜で詩『田琳を偲んで』を書いた。田琳との友情は、半世紀前に築いたのだった。

田琳を追悼するために、山丁は、三月十日、瀋陽の老友と相談して、省作家協会幹部休養所の小会議室で、内輪の追悼会を催した。参加者には、木風夫妻、李正中、朱媿夫妻、郭鋒、陳南夫妻、王建中、劉丹華、里揚、梁山丁・李素秀夫妻などがいた。

三月末に、山丁は、雑誌『次の世代』からの依頼で、「日本と偽政府の統治の下で」を寄稿した。

九月二十六日、遼寧組合大廈で、遼寧大学日本研究所主催による「中国東北と日本国際学術研究会」に参加した。

翌二十七日、同じ遼寧組合大廈で、劉丹華の新作『旅

痕心曲』発行座談会に参加した。山丁はこの本のために序を書いていた。

十二月三十日、山丁自ら自分のペンネームについて解釈した原稿を完成させた。これは山丁とその文学を研究するには、意義がある。

年が開けると、黄万華から、『東北淪陥時期文学史論』（一九九一年十月・北方文芸出版社）が送られてきた。そのなかの『冷霧』・『夜哨』から『芸文志』、『文叢』、『文選』まで——東北淪陥時期文学社団流派の初歩的考察」と、『東北郷土文学の勤勉な開拓者——山丁の創作を論ずる』で、山丁の文学が紹介された。

この一年に山丁は、以下の文章を書いた。

一九九二年四月の『遼寧政協報』に「蕭軍を偲ぶ」を、一九九二年三月の『晚晴報』に詩「女流作家田琳を追悼する」を、一九九二年六月の『文学信息』に「私は陳隄との友情」（文壇交遊録その二）を、八月の『文学信息』に「羅烽を想う」を、一九九二年二月の『晚晴報』に「蕭軍に関する二冊の本を読んで」を寄稿した。

このほかに、一九九二年八月二十八日、「日本帝国主義と東北淪陥時期文化」の国際シンポジウムに参加して、『関外郷土文学の主張と特徴』という題で発表した。後

に、この発表を整理して、一九九二年九月二十日の『文学信息』に載せた。「中国東北淪陷時期の郷土文学」（後書き付き）は、『中日関係研究の新しい思考』（遼寧大学出版社 一九九三年四月）に収録されている。

一九九三年 八十歳

一月六日、山丁は蕭紅没後五十周年を記念するために、『東北郷土文学開拓者―蕭紅』を書いた。

七日、「文壇交遊録」のもう一編『力をあたえてくれた女作家呉瑛』を完成した。八十歳にもなったにもかかわらず、山丁は一日たりとも創作を怠けることはなかった。「文壇交遊録」の次作『秋螢を記す』を手がけようとした八日の午後、山丁は再び病に倒れた。

山丁は遼寧中医学学院附属病院幹部病棟に運ばれ、脳出血と診断された。病状は極めて深刻だったものの、二十日あまりの治療の甲斐あって、山丁は奇跡的に一命をとりとめた。このようなことは、遼寧中医学学院附属病院でも有史以来のことである。『遼寧日報』、『衛生と生活』などの新聞は、山丁の四ヶ月にわたる闘病生活を報道した。

五月、東北師範大学日本研究所教授呂元明は、長春へ

山丁を見舞った。呂元明は、日本社会文学会代表・法政大学教授の西田勝の慰問の意を伝えるとともに、山丁が病気で日本を訪問することはできないことに対しても、遺憾の意を表した。山丁の提案を受け入れて、遼寧人民出版社副編集長の劉丹華は、遼寧省の代表として、七月一日から七日にかけて、日本を訪問することになった。劉丹華は帰国後、日本での見聞を山丁に報告した。

十二月三十日、遼寧省作家協会老幹部処と家族は、山丁のために八十歳の誕生祝いと、文学活動六十周年のパーティを催した。省作家協会副主席、旧友や親族など、約八十人が参加した。

中国共産党員になることは、山丁にとってかねてからの願望であった。病気がもつとも危険な時でも、共産党入党のことを忘れなかった。

一九九三年三月五日、省作家協会は山丁の申請を受け入れて、予備党員となることを許可した。翌年の三月六日、正式に中国共産党員になった。六十年來、山丁は偽滿洲時代、国民党統治、社会主義国家建設など、たえず複雑な時代変遷の試練を受けてきた。新しい社会主義建設の過程において、山丁は自分の真の人生の目標を見出し、共産主義のために自分のすべてを捧げることを誓

った。

一九九四年 八十一歳

山丁の病状は、夫人の献身的な看護の下で、退院して一年が過ぎてからめっきり回復した。散歩するほかに、一部の会議に参加し、部分的に社会活動ができるようになった。

四月七日、山丁は夫人に伴われ、北京へ療養に向かった。四月の北京は、春うららかで、万物蘇るもつとも快適な季節だった。

山丁は北京で脳の検査をしたほかに、環境を換えて、子孫たちとの団欒を楽しむのが目的だった。家族愛は何よりの治療薬である。山丁夫妻は、北京で四十日も滞在し、五月二十日に瀋陽に戻った。

八月二十一日午後、山丁夫妻は瀋陽賓館で、西田勝が率いる日本社会文学会訪中団一行と会見した。一九九二年、長春で知り合った岡田英樹教授、谷本澄子などと再会したほかに、大谷大学専任講師の李青や、周海林などの新しい友人とも歓談した。

当日の晩に、座談会が開かれた。参加者には山丁、金湯、鉄漢、木風、劉丹華などがいた。この老作家は、訪

中団一行が発した偽滿洲時代の文芸諸問題に関する質問に答えた。

山丁にしてみれば、西田勝と日本の友人の尽力で、当時多くの東北抗日闘志と劉丹華を迫害、拷問した土屋芳雄を見つけてくれたことが、非常に印象深かった。

土屋芳雄は、事前に吹き込んだ劉丹華への謝罪のテープを座談会で放送した。会議後に、このテープを劉丹華本人に手渡した。

会議の合間に、山丁は、『天のはてに伸ばした大地』、『長夜螢火』、『燭心集』を日本の友人に贈った。

九月二十日、児童作家胡景芳は、自作の中編小説を山丁に贈った。

国慶節に、山丁夫妻は長春で家族とともに過ごした。来年の春節には、山丁の曾孫が誕生するよていである。

山丁は家族団欒を想い存分楽しんでる。

十月十八日、山丁は遼寧省不老松画会会長の王宴の七十七歳の誕生会に出席した。参加者には、魯迅美術学院院長の王盛烈、画家の劉恩同教授、詩人曉人、老作家劉丹華など十数人がいた。一同は杯をあげて、王宴の長寿を祈った。

十月、国務院は、山丁に百元の国家特別補助金を支給

することを通達した。これは単なる百元の問題ではなく、共産党の自分の業績や知識人に対する心配りだと山丁は認識し、国家のこの決定に大いに感動し、幸せに思った。山丁には、理不尽な二十年の冤罪を蒙った不幸な歳月がある。しかし、共産党「三中全会」のお陰で、苦境から解放され、命が蘇った。かれは二十年ものブランクを努力して埋め、国と共産党に恩返しをしようと固く決心した。

一九九五年 八十二歳

一月四日、山丁夫妻は、瀋陽迎賓館で、吉林大学外国語学院で客員教授をしている原武哲、和子夫妻と会見した。原武哲は福岡文学短期大学の教授であり、夫人は久留米市青峰小学校の校長である。

原武哲は、淪陥時期の文学に興味をもっているため、瀋陽で当時の老作家のとの座談会の開催を望んだ。原武哲夫妻とともに東北師範大学の教授呂元明も一緒に瀋陽に来てくれた。座談会は二日間続いた。省文学連合会の副主席の李樹謙、瀋陽出版社社長の李樹権、および三、四十年代の作家金湯、鉄漢、李正中、劉丹華などが参加した。

四月二十二日、山丁は、瀋陽出版社主催の国家重点出版圖書、『東北現代文学大系』の編集討論会に参加した。関係部門の責任者、編集委員のほか、学者と健在な東北老作家、計四十人が出席した。

年初めに、西田勝・西田平和研究室が編集している『地球の一点』のために、『緑の谷』出版前後」を書いて、七十五、七十六期に掲載された。

五月、『中国老人報』に、長春の孟語夫人が撮影した「抗戦勝利五十周年の前に老作家は戦争を論じる」と題する写真を掲載した。写真の右から二人目が、山丁である。

六月、遼寧大学日本研究所の劉立善は、山丁を訪ねた。『緑の谷』の一九四三年版本と同じ年に出版された日本語訳本を返してくれた。劉氏が最近出版した本、『日本の白樺派と中国作家』（遼寧大学出版社 一九九五年）も贈送した。本のなかで、有島武雄と梁山丁の作品についての比較が行われており、学术界で注目を集めた。

九月十八日午前、山丁夫妻は、瀋陽東盛賓館三階で開かれた「中国蕭軍研究会」発足大会に参加した。蕭軍死後、文学界の多くの有識者が、蕭軍研究会の設立を望み、山丁は呼びかけ人の一人だった。席上、「中国蕭軍研究

会」の顧問に山丁が選出された。

十一月、西田勝・西田平和研究室が編集している『地球の一点』に山丁が書いた「第三回大東亜文学者会議参加の前後」を発表した。

十一月二十一日、日本から『大谷大学学報』が贈られてきた。李青の書いた「満洲文学の一側面―梁山丁の『緑の谷』」が掲載されていた。近年、海外の山丁研究も非常に盛んである。

内外の研究者が、梁山丁の文学を研究する便を計るため、山丁は、一九八八年から『梁山丁研究資料』を編集することを考えていた。中央文学研究所もこの本を出版計画に入れたが、さまざまな原因で出版は滞っている。山丁の健康を祈りながら、本の一日も早い出版を祈るものである。

一九九六年 八十三歳

『梁山丁研究資料』を出版することは、山丁の長年の願望である。しかし、近年、公務の忙しさのあまり、ついで、個人のことを顧みる暇はなかった。一九九五年に、山丁は重病に二回も入院した。これをきっかけに、夫人の李素秀は旧・新友を集め、ようやく編集班を組織した。

なかには、黑竜江大学教授の陳隄、吉林省文学研究所所長の李春燕副研究員、同研究所の馮為群研究員、遼寧省文学研究所所長の王建中研究員、遼寧大学の張毓茂教授、著名な作家金河、遼寧少年兒童出版社編集者の張雨門、および山丁夫人李素秀がいた。具体的には、王建中と李素秀が、第一部の「生い立ち」、金河は、第二部の「文学の主張と創作の道のり」、馮為群と李春燕が、第三部の「研究論文抜粋」を担当することになり、ほかの者もそれぞれの分担を請け負ってくれた。

編集班の努力のお陰で、一九九六年の秋に、三十五万字の原稿と二十枚の各時代の意義ある代表的な写真を収集し、整理した。張毓茂教授は、出版局の局長于金蘭にこの原稿を渡し、出版の申請をした。于金蘭局長の話では、一九九六年の末に遼寧人民出版社文史編集室に渡したとのことである。一九九七年に読者に提供できればと願っている。

山丁は『梁山丁研究資料』の編纂に、多くの資料を提供した。これらの資料は、ほとんど名譽回復後にこつこつと集めたものである。また、数多くの友人が評論文などを寄せてくれた。かれらは、偽満洲時代とともに通り抜けてきた旧友、朝鮮戦争時に肩を並んで仕事してきた

同僚、新中国成立後に甘苦をともししてきた同志たちである。かれらの文章は、山丁の六十年にわたる文学生涯における生活、仕事、学習、戦いなどを、さまざまな角度から回想をしている。

山丁夫人は、八万字からなる、「生涯の略歴」、「作品年表」、「ペンネーム注釈」、「評論文章目録」を書いた。文学など素人の夫人にとっては、まさに至難の仕事であった。このほかに、各方面との連絡を一手に引き受けた。山丁夫妻の疲れを癒すために、夏休みを利用して、末孫を連れて、長春、三岔河行きの列車に乗った。旅行中に身内との団欒のひとときを楽しんだ。

二週間の旅を終えて、八月十七日に日本社会文学会との座談会に参加するため、夫妻は八月中旬に瀋陽に戻った。

八月十七日夜七時、山丁は夫人に伴われ、日本社会文学会座談会に参加した。長春にきた日本の友人のほかに、瀋陽の劉丹華夫妻、楊絮夫妻、鉄漢などもいた。しかし、金湯、李正中、木風などの姿はなかった。老いていく仲間を思うと、些か淋しかった。次回の一九九八年の対面するときには、何人、来られるだろうか。

山丁も以前に比べれば、めっきり衰えてきた。座談会

で挨拶も完璧に話せなかった。

山丁は脳の病を得てからは、ほとんど社会活動に参加しなくなった。この年の十月七日、山丁はまた遼寧中醫院に運ばれ、十一月末から自宅療養に換わった。

十二月三十一日、山丁は八十三歳の誕生日を迎えた。一九九七年の最初の日、一月一日のカレンダーがめくられたとき、山丁は八十四歳の年を歩み始めた。

ここで山丁の長寿を祈り、祖国の文学の貢献に力添えることを願ってやまない。

本稿は梁山丁夫人李素秀が提供した資料を訳者が翻訳、整理し、それに加筆と若干の訂正を施したものである。

『梁山丁の歩み』も連載の最終回を迎え、原稿の最終チェック段階に入ろうとしていたちょうどその時に、山丁夫人の李素秀女史より、七月二十四日に山丁死去の訃報を聞かされた。

山丁夫妻とは、昨年の夏に長春でお会いした。山丁はここ二、三年病におそわれていたものの、私と会った時には元氣そうに談笑していた。別れ際に、瀋陽での再会を約束した。私はまだその時のことを鮮明に覚えている。それが山丁との最後の対面になってしまおうとは、夢にも

思わなかった。誠にやり切れない思いで一杯である。

山丁は一九九七年七月二十四日に死去した。享年八十三歳。

かれは波乱の人生に幕をおろし、永遠の眠りについた。かれが残してくれた作品群は、いつまでも読まれ続けていくにちがいない。

ご冥福を祈る。

(元)

参考文献

- (1) 『東北文学研究史料』第一輯（哈爾濱文学院 一九八四年八月）
- (2) 『東北文学研究史料』第二輯（哈爾濱文学院 一九八五年十月）
- (3) 『東北文学研究史料』第三輯（哈爾濱文学院 一九八六年九月）
- (4) 『東北文学研究史料』第四輯（哈爾濱文学院 一九八六年十一月）
- (5) 『東北文学研究史料』第五輯（哈爾濱文学院 一九八七年十一月）
- (6) 『東北文学研究史料』第六輯（哈爾濱文学院 一九八七年十二月）
- (7) 『東北文学研究史料』第七輯（哈爾濱文学院 一九八八年十二月）

（大谷大学専任講師）